

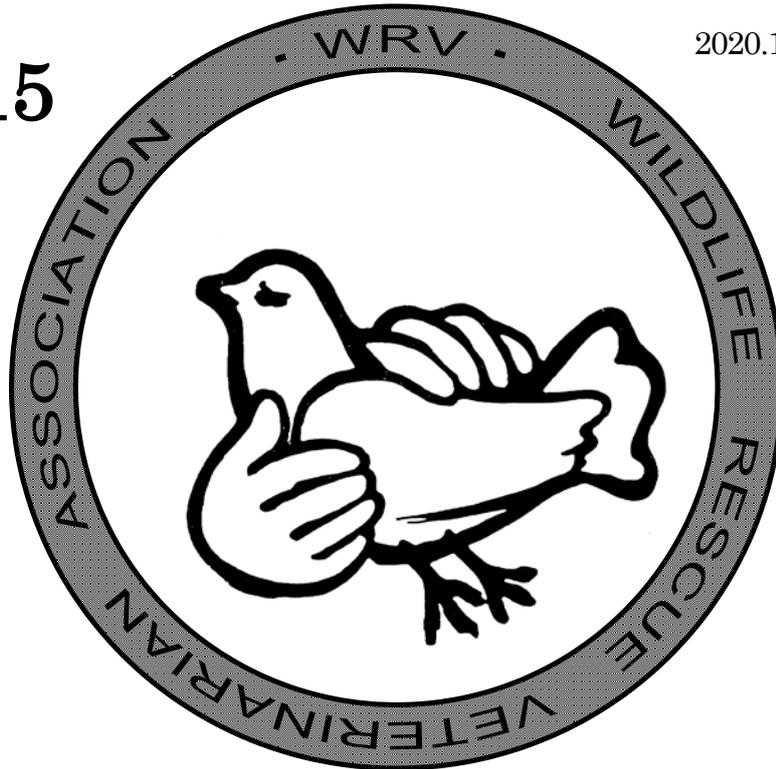
WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.115

2020.12.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.115 目次

Falconry(鷹匠技術)を用いて行った傷病ハヤブサのケアおよび野生復帰トレーニング	2-5
施設紹介ー岡山県自然保護センター	6-7
施設紹介ー岡山県鳥獣保護センター	8-9
市川市行徳野鳥観察舎「あいねすと」がオープンしました	10
冬場でも繁殖する鳥	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

Falconry (鷹匠技術)を用いて行った傷病ハヤブサのケアおよび野生復帰トレーニング

○石川真理子¹⁾, 石川和也²⁾

(¹⁾川崎市夢見ヶ崎動物公園, ²⁾STOOPER Falconry Equipment)

【背景】

Falconry (ファルコンリー:鷹匠の技術)は、世界中で猛禽類のトレーニングに用いられている技術であり、その技術を持つ訓練者を Falconer (ファルコナー)と呼びます。Falconry は、猛禽類の性質を理解し、細かなステップを積み上げながら訓練を行っていく技術であり、海外では希少猛禽類の繁殖・放鳥や傷病鳥リハビリテーションなどに広く応用されていますが、日本でFalconryを傷病野生猛禽類のリハビリに用い、野外でのトレーニングを実践している施設は多くありません。

私の勤める夢見ヶ崎動物公園には、年間100件前後の傷病野生鳥獣の搬入がありますが、放野後の追跡調査はほとんど行えていません。2019年に東京農業大学との研究として、「傷病・人工保育タヌキの野生復帰検証を目的とした追跡調査」をGPSを用いて実施したものの、猛禽類についてはこれまで実施していませんでした。

傷病鳥獣の放野後の状態を確かめなければ、治療やリハビリ方法等の効果について適切に判断することはできないので、放野後の追跡調査及び生存確認を行い今後の救護に生かしていくことの必要性を常々感じていました。

そこで今回、2017年に骨折で保護され当園に搬入された野生のハヤブサについて、骨折整復手術後、Falconryを用いて基礎トレーニング、野外でのフリーフライトを経て、ハンティングトレーニングまでのリハビリを行い放鳥したので、その概要を紹介します。

【治療とトレーニング】

症例は2017年に保護搬入されたハヤブサ(♀、若鳥)で、右手根中手骨の開放骨折がありました(写真1)。手術は麻酔下で行い、皮膚を縫合することで骨端同士を近づけ、外側からギプス固定しました(写真2)。



(写真1 保護時のレントゲン写真)



(写真2 手術の様子)

給餌は、羽毛を除去した細切れのウズラ胸肉をブドウ糖液に浸したものを、ピンセットで口元に持っていき、自発的に食べない場合には強制給餌します。一口食べることでそれが呼び水となり、食欲が出る場合があります。第5病日まで自力採食はなかったものの、第6病日から餌を食べ始めたため、第7病日からは、ウズラ肉の塊をグローブで差し出したものを食べさせる訓練を始めました。第9病日には骨折部分は癒合していたものの、右翼は下がり気味であること、また胸筋がだいぶ落ちていることから、野生復帰に向けたトレーニングが必要と判断し、第12病日から自宅に連れ帰ってトレーニングを開始しました。トレーニングは、神奈川県野生動物リハビリターの資格を持つ Falconer である石川和也と2人で行いました。



(写真3, 4 マニングの様子)

トレーニングで一番最初に行うのが Manning(マニング)です。人ということ、据える(拳に乗せる)こと、一緒に歩くこと等、人や環境に慣れさせることを目的に行います(写真 3,4)。猛禽類は体重がフルの状態だと、人を恐れ訓練どころではありません。そのため訓練が可能になるまでハヤブサの体重を落とし、ハヤブサにとって刺激の少ない、静かで暗い部屋で据えるところから始めます。

よく「トレーニングによって人に馴れた野生のハヤブサは野生復帰できるのか?」という質問を受けます。野生のハヤブサは、トレーニングにより我々を「許容」する状態になりますが、空腹が満たされれば人が近くにいることを嫌がり、暴れ、野生に近い状態となります。今回のように長期に渡り保護飼養した場合であっても、ハヤブサは人に依存することはなく、あくまでも我々を「許容」している状態であると感じました。もちろん、馴れすぎることはないよう、ハヤブサとの接触は最低限としました。

拳の上で落ち着いて餌を食べることが可能になったらハヤブサをパーチ(止まり木)から訓練者の拳へ呼ぶ訓練に移ります。成功したら肉(報酬)を与え、毎日少しずつ距離を伸ばしていきます。拳にくるようになったら、今度はジャンプアップに移行します(写真5)。これは人間の筋トレのようなもので、訓練者に慣れさせるほか、筋力・体力アップ、代謝促進を目的とし、基礎訓練に欠かせないものです。今回のハヤブサにおいても、翼のスムーズな動きのリハビリとなり、この訓練をはじめてから右翼の下垂は徐々に目立たなくなってきました。

ジャンプアップと並行してルアー(疑似餌)トレーニングを行いました(写真6)。大きめの肉をルアーを取り付け、まずはハヤブサの目の前に置きキャッチさせるトレーニングをします。これを繰り返すことで、元々野生下では見たことがないはずのルアーも、ハヤブサにとって「好きなもの・魅力的なもの」となり、ハヤブサはこのルアーを追いかけるようになります。ルアーを追いかけることで筋力、フライトスキル、ハンティングスキルを鍛えます。野外では人や車の往来、野生猛禽の襲撃など、ハヤブサが嫌がる、予期せぬ色々な刺激があり、Falconer から離れて遠くに飛んでしまうことがあります。そうした場合、ルアーによりハヤブサを呼び戻せるようにしておくことは重要です。

次に野外でクリアンス(ライン)を付けてのフライトを行いました。ハヤブサの羽ばたきは力強く、左右同じように動いており、直線の飛行は問題なさそうだと判断しました。クリアンス付きフライトで、30~40m離れていても即時反応が確実に見られるようになった後、フリーフライトに挑戦しましたが、骨折の影響はほぼなく、しっかり飛べることを確認しました(写真7,8)。



(写真5 ジャンプアップ)



(写真6 ルアートレーニング)



(写真7, 8 フリーフライト)

野生個体とは人に慣れすぎないよう、最低限の関わりに徹していることもあり、トレーニング中は、ファルコナーやルアーに向かって来ないことも度々ありました。そこが野生傷病猛禽のフリーフライトにおいて難しいところであり、よりシビアな体重設定のほか、色々な要因を検討しながら日々のトレーニングを進めていきました。それは、長年ハヤブサのトレーニングを行っている我々にとっても、簡単なことではありませんでした。

このフリーフライト後、実戦トレーニングを積み重ねる予定だったのですが、ハヤブサの体調不良が見られたためトレーニングをいったん中止し、体重を戻し体調回復に努めることにしました。その後換羽期を経てトレーニングシーズンが来たものの、軽度の呼吸器症状が見られたため投薬治療を行ったことなどから、時間がかかってしまいましたが2019年秋からトレーニングを再開しました。2018年の春に既にフリーフライトまで行っていたので、再開後は体調悪化を避けるため体重をできるだけ下げ過ぎない方法に変更し、ハンティングの実践に重きをおいたトレーニングを続けました。

【放鳥(リリース)について】

これらのトレーニングを経て、ハヤブサの放鳥時期を2020年5月としました。放鳥に際しては、数々の野生猛禽類のリハビリ・追跡調査の経験を持つ団体である「放鳥's」代表の境氏や、野生猛禽類・鷹狩に関して豊富な知識と経験を有するNFC(日本ファルコナーズクラブ)顧問の金子氏などに助言を賜りながら検討しました。特にカラスによる妨害については、「カラスの子育て期である春は避けたほうが良い」という意見を頂いたものの、換羽前のリリースを目指していたこと、またハヤブサのフライトがその時一番良い状態であったことも考慮し、最終的に5月6日にリリースをすることとしました。その際、初列風切羽根の先端が折れていましたので、猛禽の継ぎ羽根専用の芯材「Falcon Fiber」を用いて、Imping(継ぎ羽根)を行いました(写真9,10)。



(写真9, 10 継ぎ羽根)

リリースは、野生復帰後の生存確認および再保護時の目印のため足環及び発信機を装着し、それまでトレーニングしていた藤沢市のフィールドにて自然の狩りに近い形で獲物を取らせ、そのままリリースとしました。採食を終えたハヤブサは、重たそうな体ながら鉄塔の上に止まり、そのまま一晩を明かしました。

それから約1週間は、リリースしたフィールドで発信機の電波を受信でき、また目視でもハヤブサの姿を確認できていたことから、行動範囲はフィールド付近に限られていると推測されました(写真11,12)。鉄塔のてっぺん付近にすることが多く、日を追うごとに飛び方は力強くなり、強風の中でも風を味方につけたようなフライトが見られました。観察をしようと双眼鏡越しに覗きただけでも、視線を感じたのか嫌がって飛び立つなど、野性味が日に日に強くなっていくのを感じました。しかしながら、5月14日(放鳥8日目)朝に目撃したのを最後に、電波の受信が出来なくなりました。



(写真11, 12 放鳥後 鉄塔に止まるハヤブサ)

捜索に協力していた仲間から、「野鳥カメラマンのブログで発信機を付けたハヤブサが撮影されている」との情報が得られたのは5月16日でした。写真を見るとたしかにそれはリリースしたハヤブサであり、5月15日に撮影されていました。目撃場所は、2017年に当該ハヤブサが保護された場所の近く(川崎市)であり、リリース場所(藤沢市内)から約35km離れた場所でした。「元々狩場としていた場所をハヤブサが覚えており、そこに戻った」という仮説を立て、5月17日に周辺での調査を行ったものの、電波は確認できませんでした。

それもそのはず、5月17日午前の調査を終えた昼を過ぎたころ、「当該ハヤブサが群馬県の警察署にて保護された」との連絡が入ったのでした。ハヤブサは、5月15日に目撃された場所から、2日間で約80km北上していました。なぜ群馬県まで飛翔したのか、詳細はわかりませんが、ハヤブサは「館林市内の畑に降りており、飛べない様子だったところを近くの住民により保護された」とのことで、急いで群馬県まで向かい再保護しました。

地面に降りていたと聞いていたので、翼の怪我や激しい衰弱を推測していましたが、再保護後の診察では幸い骨折はなく、羽ばたきもおかしな動きはなく、若干の脱水はあったものの、体重は781gで思いの外元気でした。便性状は、尿酸だけでなく固形物も少量ながら入っており、何かしら狩りをして餌を獲っていたのではないかと推測されました。

気になったのは風切羽根の抜け具合でした。左右初列風切羽根が数枚ずつ抜けており、そのせいで飛行に支障が生じたと考えられました(写真13)。このように一気に羽根が抜けた原因としては、単に換羽期だったというだけでなく、リリースに向けて体重を一気に上げたこと、またリリース前と比べリリース後に紫外線を浴びる量が増えたことで換羽が一気に進んだという要因が考えられました。「カラスが猛禽の羽根を抜く」という事例も聞いており、その可能性も否定できませんが、今回、尾羽根や発信機の損傷はなく綺麗でした。

放鳥後に出戻りとなったことは残念でしたが、野鳥カメラマンが、ハトにアタックする姿を目撃しており、狩りにもチャレンジしていたようです。

また、あの羽根の状態で群馬県まで飛翔できたことは、体力も含め、Falconry Training の効果があったものと評価しています。それらを踏まえ、再リリースは羽根が生え揃い、体力を万全にした状態でチャレンジすることとしました。



(写真13 再保護後のハヤブサの羽根の状態)

【2度目のリリース】

羽根の状態、体調ともに回復した2020年10月2日、2度目のリリースを同じフィールドにて行いました。足環と発信機は一度目と同様に装着しました。

1シーズン、フルにトレーニングしたハヤブサは、次のシーズンには、前シーズンほど時間をかけなくても体力やフライトスキルを取り戻します。当該ハヤブサに関しても、放鳥後の数日間のフライトで良いフライトパフォーマンスを取り戻すことが期待できたため、再リリース時には、敢えてトレーニングは行いませんでした。

そして放鳥後、翌日の朝までは同フィールドにて電波が拾えていましたが、それ以降電波は拾えなくなりました。

【まとめ】

今回、約3年にわたり、Falconry を用いたハヤブサのトレーニング、そして放鳥から放鳥後の追跡調査まで行いました。我々自身はじめての試みもたくさんありましたが、これまで培ってきた経験を踏まえつつ、多くの方々に意見を伺いながら当プロジェクトを進めてきました。当初は短期間でのリハビリを目指しましたが、思うように進まない部分もありました。日々のトレーニングや追跡調査は多くの労力を要し、決して完璧に出来たわけではありません。しかしながら、まだ国内では実例の少ない、Falconry を用いた傷病野生猛禽類のリハビリ・放鳥に関して、トレーニング方法、体調管理、リリース時期やリリース後の行動等についてのデータが得られたことは、大変貴重であり、かつ今後役に立つものと思っています。

野生猛禽類は他の野鳥と同様、飼育鳥よりも神経質であり、傷病鳥として搬入された場合の体調管理等は難しいものの、Falconry の道具やトレーニングを適切に用いることで、鳥自身のストレスや羽根の損傷を抑え、健康管理を行うことができます。

また傷病野生猛禽類、とくにハヤブサの野生復帰においては、放鳥してもその後の「狩り」が成功しなければ、野生下で生存していくことが難しいため、リハビリとして基礎的な飛翔訓練と同時に、より実践的なハンティングトレーニングを行うことが、放鳥後の生存率向上に繋がると考えられます。

とはいえ、実際、野生動物に対してトレーニングをすることは、長年の猛禽類トレーニングの経験があっても難しく、ましてや経験のない方が見よう見真似で出来るものではありません。そんな状況を少しずつ変えていければ…と、現在、「Falconry 技術を取り入れた傷病野生猛禽類リハビリに取り組みたい」という富山県鳥獣保護センターからの依頼を受けて、出張やオンラインでの Falconry Training 指導の取り組みも試みています。

日本では、野生動物リハビリテーターとして協力できる Falconer の数はまだ多くはないですが、野生復帰率を高めるためには、行政、獣医師、Falconer(野生動物リハビリテーター)との連携、そして放鳥後の追跡調査などが重要であり、今後もぜひ取り組んでいくべきだと思っています。

今回の発信機はGPSではなくビーコンタイプを使用し、八木アンテナを使用していたのですが、ハヤブサの行動圏を考えると、発信機はGPSでないと捜索が難しいと痛感しました。GPSであれば、1度目の群馬までの行動の軌跡、2度目のリリース後の軌跡について、より詳しい調査ができたのではないかと思います。

野生動物保護施設やWRVのウェブサイトにおいて、当該ハヤブサ目撃情報の提供を呼びかけていますが、残念ながら情報は得られていません。もし心当たりのある場合はぜひ情報提供いただけますよう、ご協力をよろしくお願い致します。

終わりに、今回のプロジェクトを行うにあたり多くのご助言をいただいた放鳥's 代表 境貴昭氏、NFC(日本ファルコナーズクラブ)顧問 金子和幸氏、ハヤブサの治療・飼養管理等に携わった夢見ヶ崎動物公園職員各位、捜索に協力いただいた白倉様、黄木様、その他ご協力いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

岡山県自然保護センター

岡山県自然保護センター タンチョウ・傷病担当一同

はじめに

自然保護センターは、自然との触れ合いを通じて、県民の自然への理解を深め、自然保護についての認識を高めるため、岡山県が平成3年11月に和気町（旧佐伯町）に開設した、自然体験のできるフィールドを有した県下随一の自然保護教育・学習施設であり、自然保護に関する指導者の養成研修、調査研究、情報の収集・提供、ボランティアの養成等の機能を併せもっています。

施設の内容としては、約100ヘクタールの優れた里山を有する自然環境の中に、草原の昆虫や小魚、水生昆虫のエリアである「虫の原っぱ」、森林性昆虫エリアである「昆虫の森」、森林の成り立ちや変遷、野鳥が観察できる「野草園」や「水生植物園」、人間の開発で失われつつあった湿地の植物を移植して、人工的に復元した「湿生植物園」などの自然観察フィールド施設がそれぞれ整備されています。また、当センターでは、絶滅の恐れのある国の特別天然記念物及び国内希少野生動植物に指定されているタンチョウを飼育しています。タンチョウの飼育を通じて自然とのつきあい方を学び、さまざまな生き物たちとの共存の大切さを日々考えています。

1. 概要

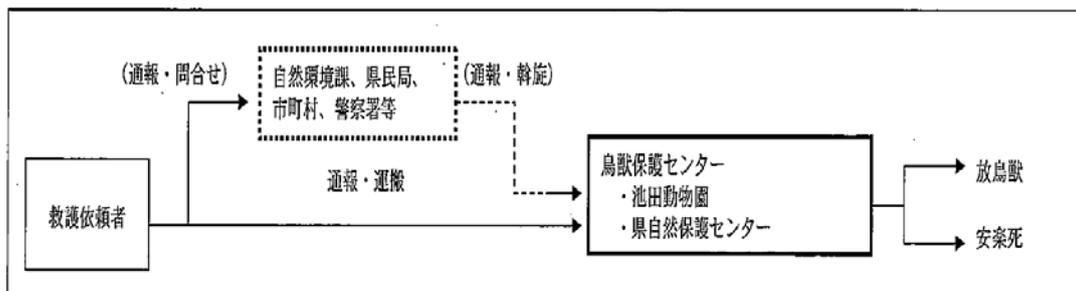
岡山県に生息する野生鳥獣の保護及び県民の鳥獣保護思想の普及啓発を図ることを目的に、平成3年11月の岡山県自然保護センター開設とともに、傷病鳥獣の受け入れ開始しています。現在は、池田動物園とともに鳥獣保護センターとして指定され、病気やケガをした野生の鳥獣を保護し、適切な治療を行い自然界に復帰させることで、岡山県に生息する野生鳥獣の保護及び県民の鳥獣保護思想の普及啓発を図ることを目的に、救護活動を実施しています。

2. 救護対象

救護対象鳥獣は、原則として狩猟鳥獣及び希少種以外の鳥類のヒナ、卵は除くものとしてされています（岡山県第12次鳥獣保護管理事業計画書より）。その為、イヌやネコ等のペット類や、家畜などの救護は行っていません。

3. 救護体制

傷病鳥獣の保護センターへの搬送は、原則として救護依頼者に行ってもらっています。



(岡山県第12次鳥獣保護管理事業計画書より抜粋より抜粋)

4. 傷病鳥獣の保護体制

タンチョウ飼育担当3名が兼務にて実施

5. 施設

治療室1室（獣医不在のため、餌等の保管場所としても使用）

鳥獣保護室5室（内エアコン設置1室～タンチョウ治療室も兼ねる）

W283 cm D535 cm H248 cm 4室

W182 cm D390 cm H248 cm 1室

施設の外観





施設内の様子



5. 傷病受け入れ実績

年度	件数	保護数		
		鳥類	卵	獣類
平成20年度	19	18	0	1
平成21年度	29	31	11	2
平成22年度	26	114	0	0
平成23年度	23	23	8	2
平成24年度	24	22	0	2
平成25年度	24	40	38	1
平成26年度	41	56	0	4
平成27年度	19	18	0	2
平成28年度	13	13	0	0
平成29年度	21	34	1	0
平成30年度	20	20	0	1
平成31年度	20	20	0	2

※平成21年度2羽、平成22年度98羽、平成25年度18羽、平成26年度13羽、平成30年度2羽の違法飼育されていた野鳥を警察署から依頼され保護。

6. その他

動物愛護の普及もあってか、保護対象とならない種や保護して時間が経ってからの連絡、ヒナの誤認救護が多くなってきているように感じます。自費で動物病院に連れて行かれてからの連絡もあり、その方々の気持ちと生き物の生死にどう折り合いをつけるか悩む日々です。

ここでは、リハビリ用のフライングケージもなく、廊下を利用してのリハビリを実施しています。殆どの動物たちは、野生復帰できず部屋の中でその一生を終えています。野生復帰できないのであれば、屋外の出来るだけ自然に近い環境で生活させ、その生活をお客様に見てもらい、人間活動による影響を実感し、自然について考えるきっかけを持っていただきたいのですが、タンチョウとの兼ね合いもあり、それもままならないのが現状です。

運よく回復した生き物を放野できた時は（こういう仕事はあまり感情移入をしない方がいいと思うのですが）、他の生き物たちの分も生き続けてほしいと、つい思ってしまう。



ハヤブサのリハビリ



フクロウの放野

岡山県鳥獣保護センター

〒700-0015 岡山県岡山市北区京山 2-5-5 [TEL:086-252-2131](tel:086-252-2131) FAX:086-254-6962

岡山県鳥獣保護センター 獣医師 林 花 奈 子

【岡山県鳥獣保護センターについて】

岡山県鳥獣保護センターは、岡山市にある野生鳥獣の保護施設です。当センターは、県内唯一の動物園である池田動物園が独自に始めた野生動物救護活動を発端とし、現在は、動物園が岡山県からの委託を受ける形で活動しています。

当センターでは、獣医師1名と飼育員1名が常勤のスタッフとして、県内の傷病鳥獣の救護活動にあたっています。原則的には、県民の方が発見した傷病鳥獣のうち、救護の必要があると判断されたものに限り、県民の方自身の手で保護・搬入してもらうことにより受け入れを行っています。傷病鳥獣の受け入れ相談対応から治療、リハビリ、そして放野までの一連の対応をスタッフが行うことになります。



【野生鳥獣救護の実績】

当センターでは、在来野生動物(鳥類・哺乳類)であれば受け入れを行います。イノシシやシカ等の大型動物やニホンザル等の特定動物は、原則受け入れの対象外としています。

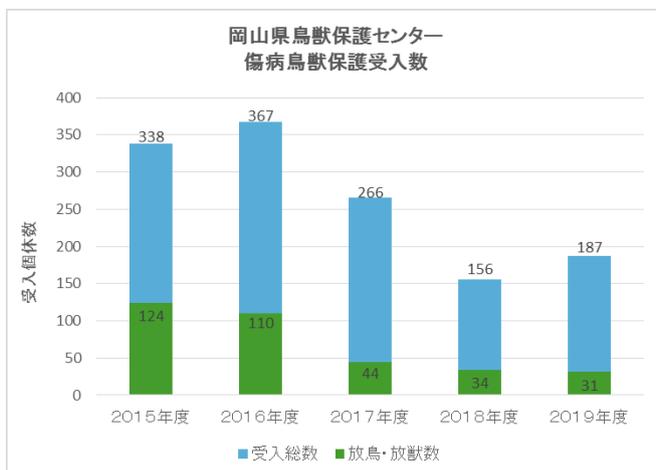
2015年度から2019年度の5年間では、受入頭羽数は多い年で400件近く、少ない年でも150件を越えています。そのうち約6%が哺乳類で、残りは鳥類です。毎年平均して、全体の25%ほどの傷病鳥獣が野生復帰をしています。

毎年春から秋にかけては、巣から落ちたヒナや巣立ち直後のヒナの搬入が多いのですが、近年「ヒナを拾わないで」活動の普及に努め受け入れの際の説明を強化したところ、鳥類については、必要外

の受け入れ数が徐々に減少してきました。

巣から落下したヒナを除けば、受け入れ理由として最も多いのが交通事故、続いて建物や窓ガラスへの衝突、そして猫による受傷等です。時には違法飼育されていたメジロなどもやってくる場合があります。

2020年度現在は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により外出規制がなされたためか、傷病鳥獣の発見自体が減っており、受け入れ数はかなり少なくなっていると実感しています。



【救護活動について】

保護される野生鳥獣はスズメやツバメ、キジバトといった身近な種が多いのですが、希少な生きもの達が運ばれてくることも少なくありません。国内希少種であるハヤブサや、岡山県内で保護活動が盛んなブッポウソウ、そして台風の時期には、内陸部まで飛ばされてしまった海鳥が保護されることもあります。当センターでは、そうした様々な種や症状に合わせた適切な治療とリハビリができればと考えています。

また、一般の方からの問い合わせによる受け入れがほとんどであるため、スタッフが詳しく聴取したうえで、その個体に保護は必要なのか、またその理由はなぜかなど、ご本人が理解して協力をいただけるような説明ができるよう日頃から努めています。



交通事故に遭ったアオバト



ルアーが引っ掛かったカワウ

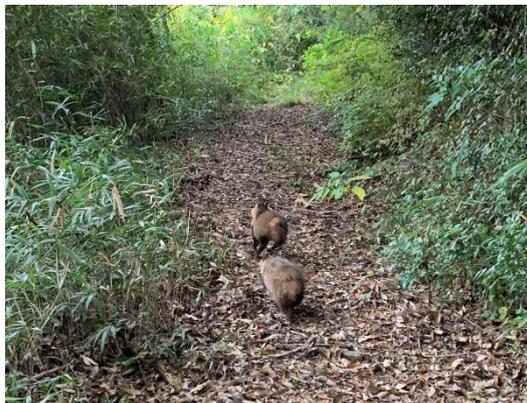
近年、岡山県内でも山間部の開発が進み、動物の住処が減少すると言われる一方で、駅前で営巣するハヤブサ等、野生動物の都市化なども見受けられるようになりました。それに伴い、市街地に増加した野生動物が農業被害や糞害などの問題をもたらしたり、逆にそうした野生動物が、事故などの被害に遭ったり等、人間と野生動物との間に生じる問題がより顕在化してきています。

また、県内では重症熱性血小板減少症候群(SFTS)が話題になったこともあり、そうした人獣共通感染症も、人と動物が共に暮らすうえで見過ごすことのできないものとなっています。

当センターではそうした実情をふまえ、傷病野生鳥獣の救護活動を、人と野生動物との共生について学んだり考えたりするきっかけにしてもらおうと、動物園内でのポスター掲示やイベントの開催等を通じた、来客への普及啓発活動にも力を入れるようにしています。



子タヌキ



タヌキの放野の様子

市川市行徳野鳥観察舎「あいねすと」がオープンしました

市川市行徳野鳥観察舎 自然環境政策専門員 中村 麻衣

「あそこに並んでいる黒い鳥はカラスですか？」

「ここに住んでいるカワウたちです。ここで子育てもしているんですよ」

「大きな白い、首の長い鳥はシラサギですか？」

「シラサギの中の一番大きなダイサギです。小柄なコサギもそこにいますよ」

子どもも大人も夢中になって望遠鏡を覗いています。子どもたちは、望遠鏡に飽きると楽しげに館内を走り回っています。

ここはオープンしたばかりの市川市行徳野鳥観察舎。「無限の可能性」をイメージした8の字を描く木造2階建て、二重ガラスの高い窓からは柔らかな陽光が差し込みます。旧千葉県行徳野鳥観察舎をご存じの方からも「良い建物ができましたね」とお声かけをいただきます。

2015年12月、旧観察舎は建物の耐震性の問題から突然休館、2018年には惜しまれつつ閉館しました。たくさんの再開のご要望をいただき、2020年10月11日、コロナ禍の影響で予定より遅れましたが、市川市行徳野鳥観察舎として新たな一歩を踏み出すことができました。建物の愛称は「あいねすと」(IchikawaのIと愛、鳥の巣・安らぎの場所の意味のnestの掛け合わせ)、公募により決定しました。

窓の外に広がる鳥獣保護区の眺め……風にそよぐヨシ原、刻々と変化する干潟の様子、季節のうつろいを告げる渡り鳥たちの姿……が戻りましたのは、休館当時、旧観察舎のインターンであった私にとっても、大変感慨深く感じられます。

「あいねすと」のコンセプトは、「交流・憩い・学習」の場を提供することです。飲み物を提供するカフェをそなえ、塩田や神輿づくりなどの行徳地域独特の歴史や文化を紹介する展示も行っています。また、身近な自然をアートとして表現する来館者参加型展示なども展開しています。野鳥の観察はもちろん、さまざまな活動を通じ、市内外から訪れる皆さまに交流の場を提供していきます。

旧観察舎の大きな柱であった野鳥病院は、鳥獣保護区の保全管理とともに千葉県の事業として、従来通りNPO法人行徳野鳥観察舎友の会の皆さんが継続しています。「あいねすと」は野鳥病院と直接的なかわりはありませんでしたが、命の大切さを発信できる場所でありたいと考えています。

「あいねすと」の運営は市川市の生活環境整備課が担っています。ゴミの分別やリサイクルについて啓発活動を行い、野生動物とヒトの生活の間の問題も担当する部署です。「あいねすと」でも、市民への環境学習の一環としてこれらのテーマを取り上げていきます。

私は旧観察舎インターンとして、野鳥病院で傷病鳥救護にかかわった経験から、ヒトの「便利な」生活が、時として野鳥や野生生物の命を脅かすことを学びました。ルールを守らずに捨てたゴミは海洋プラスチックとなり野生の生き物たちの命を奪うかもしれない、といった気づきを来館者のみなさまに持っていただくことも、「あいねすと」でのひとつの使命であると思っています。

「あいねすと」には、小さなお子さんを連れた若いご家族から、毎朝のコーヒーを楽しまれる年配の方まで、多くの方にご来館いただいています。くつろぎのひと時を過ごしながら、野鳥や身近な生活環境と自然環境について、少しでも興味を持っていただくことができれば幸いです。



「あいねすと」外観



「あいねすと」観察スペース



来館者参加アート作品

※市川市行徳野鳥観察舎「あいねすと」千葉県市川市福栄4-22-11 電話 047-702-8045
市公式Webサイト <https://www.city.ichikawa.ig.jp/env09/1111000028.html>

冬場でも繁殖する鳥

地球上には、真冬の南極大陸という零下60℃、体感温度にすると零下80℃～90℃にも達する、極限状態の中で繁殖するコウテイペンギンのような鳥が存在しています。まさに化け物のような鳥類とも言えますが、それとは比較にならないものの、通常は春先からせいぜい初秋までを繁殖期とする身近な野鳥の中にも、冬場に繁殖行動を起こすものがいくつか見られます。

その一つがハトの仲間です。ご存じの通り、ハトの仲間は素囊(そのう)から剥がれ落ちる栄養価の高いピジョンミルクを与えることによって、ヒナを育てるという独自の繁殖能力を持っていますが、それゆえに、親鳥の栄養状態さえ良ければ、冬場でも繁殖を行うことがあります。

私ももう20年近く前になりますが、コウノトリで有名な兵庫県豊岡市を12月の下旬に訪れた際に、あるお宅の窓際の植え込みの中で、周囲を雪が舞う中、巣にうずくまるキジバトのヒナの姿を確認したことがあります。また、都心にあるマンションのベランダの室外機のそばなどで、12月～2月にドバトが繁殖する姿を何度も観察しました。

一方、大型の鳥の中で、冬でも繁殖を行うものの代表がカワウです。

上野公園の不忍池の周辺など、いくつかのポイントでは、毎年のように冬場でも営巣しているかれらの姿を見ることができます。カワウの場合は、同じつがいも年に何度も繁殖するというわけではありませんが、つがいごと、あるいは地域ごとで、繁殖時期にかなりばらつきがあると言えるようです。いずれにしても、採餌条件等が整っていれば、カワウは冬場でも繁殖可能な鳥ということになります。

なお、幼鳥に関わる傷病保護の相談事例については、カワウの場合はごくまれですが、キジバトやドバトについては、少ないながらも冬場に寄せられることがあり、やはりその時期の繁殖行動の証明にもなっています。

世界的に見ても、冬場に繁殖する鳥類というのは限られてきますが、それだけにこうしたハト類やカワウの姿というのは、大変興味深いものがあります。会員の皆様にも、機会がありましたら冬場の繁殖行動に、是非注目してみてください。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)



【 事務局より寄付のお礼 】 寄付ご協力者(敬称略) (令和2年9月1日から令和2年11月30日)

○寄付金 (一般) 2020.11.30 動植物観察研究会 1,000円

事務局日誌 2020.9.19～2019.12.16

=== 9月 ===

- | | |
|--|--------------|
| 20: 第4回練馬西青色申告会 理事会 (書面表決) | 対応: 新妻、町田 |
| 22: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 26: 日本野生動物医学会・第75回理事会 (Web会議) | 対応: 羽山、加藤 |
| 28: 東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習 (Web講義) | 対応: 皆川 |
| 29: 敬人会勉強会<たけみ敬三参議院議員> (ホテルグランドパレス) | 出席: 小松 |
| 30: WRV ニュースレターNo.114 発行 | 対応: 小松、箕輪、齊藤 |

=== 10月 ===

- | | |
|---|--------------|
| 01~02: 東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習 (水鳥救護研修センター) | 対応: 皆川、箕輪、齊藤 |
|---|--------------|

- 06：日本獣医学会プログラム委員会 (Web 会議) 対応：加藤
- 08：野生動物対策技術研究会・第11回大会 (Web 開催) 対応：加藤、皆川
- 08：施設のガラス窓及び床の大規模清掃 (水鳥救護研修センター) 対応：齊藤
- 11：あいぬすとく新・行徳野鳥観察舎>開館 (千葉県市川市) 対応：箕輪
- 12：練馬西青色申告会 役員研修会 (勤労福祉会館) 出席：新妻、町田
- 14：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習 (Web 講義) 対応：皆川
- 15~16：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習 (水鳥救護研修センター) 対応：皆川、箕輪、齊藤
- 17：アライグマ連絡会学生部会研究発表会 (Web 開催) 対応：小山
- 21：山梨県特定外来生物(アライグマ)対策会議 (やまなしプラザ：Web 参加) 出席：加藤
- 22：かながわボランティア活動推進基金 21 奨励賞・成長支援事業事前調査 [神奈川支部] 対応：皆川
- 23：千葉県アライグマ・ハクビシンセミナー (Web 開催) 対応：加藤
- 24：(NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川支部] 対応：皆川
- 28：JICA「海外保安実務者のための救護・環境防災研修」関係資料提出 (海上保安庁) 対応：中津、箕輪
- 28：明日の日本を語る会<中川雅治参議院議員> (東京プリンスホテル) 出席：小松
- 29~30：第1回油等汚染事故対策水鳥救護研修 (水鳥救護研修センター) 対応：小松、皆川、御厨、近江谷、箕輪、齊藤
- 30：小笠原における油汚染対策・野鳥救護体制に関する打合せ (水鳥救護研修センター) 対応：小松、皆川、箕輪、齊藤

=== 11月 ===

- 01：稲城市防災訓練 (多摩川矢野口河川敷) 対応：小松
- 01：日本コウノトリの会・関東地区交流会 (栃木県小山市) 出席：箕輪
- 05：公明党獣医師・動物看護師議員懇話会 (参議院第2議員会館会議室) 出席：小松
- 06：令和2年度第3回東松山市環境審議会 (東松山市役所全員協議会室) 出席：小山
- 07：「ホテルと生物多様性の未来を考える」シンポジウム (東松山市高坂丘陵市民活動センター) 出席：小山
- 08：「サンバが棲む小川町の里山を護ろう！」シンポジウム (埼玉県小川町立図書館) 出席：小山、箕輪
- 12：政経フォーラム<小倉まさのぶ衆議院議員> (憲政記念館) 出席：小松
- 12：かながわボランティア活動推進基金 21 幹事会 (県民活動サポートセンター) [神奈川支部] 対応：皆川
- 15：神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座 (講義：県民活動サポートセンター) [神奈川支部] 対応：皆川、箕輪
- 17~19：カモ類捕獲調査 (宮城県・伊豆沼) 対応：加藤
- 19~20：第2回油等汚染事故対策水鳥救護研修 (水鳥救護研修センター) 対応：小松、皆川、御厨、近江谷、箕輪、齊藤
- 22：神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座 (講義：県民活動サポートセンター) [神奈川支部] 対応：皆川、金坂、加藤
- 22~23：第41回動物臨床医学会年次大会 (Web 開催) 対応：田向
- 25：野鳥救護カルテ記録の確認<森林総合研究所・川上和人氏> (水鳥救護研修センター) 対応：箕輪、齊藤
- 27：令和3年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」後援名義申請書提出 (環境省) 対応：箕輪

=== 12月 ===

- 03：第12回日本医師会・日本獣医師会連携シンポジウム「薬剤耐性(AMR)対策アクションプランの成果と次期の展望」 (Web 開催) 対応：小山
- 11：かながわボランティア活動推進基金 21 補助金事業事前調査 [神奈川支部] 対応：皆川
- 12~13：第10回家畜感染症学会学術集会・15周年大会 (Web 開催) 出席：小山

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 115 2020.12.25 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302 TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男